




琉球大学学術リポジトリ

子宮体癌におけるリンパ管侵襲・静脈侵襲の個別評価の臨床病理学的意義

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Wakayama, Akihiko, 若山, 明彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/39266

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	若山 明彦
論文審査委員	審査日	平成 30年 1月 31日	
	主査教授	村山 貞之	
	副査教授	斎藤 誠一	
	副査教授	加賀部 謙之輔	
(論文題目)			
Lymphatic vessel involvement is predictive for lymph node metastasis and important prognostic factor in endometrial cancer (子宮体癌におけるリンパ管侵襲・静脈侵襲の個別評価の臨床病理学的意義)			
(論文審査結果の要旨)			
1. 研究の背景と目的			
子宮体癌は罹患率が最も高い婦人科癌であり、近年本邦でも明らかに増加している。多くの症例は子宮体部に病変が限局した進行期 I 期の状態で発見され、5年生存率は約 90%と予後良好である。再発高危険群に対する術後の補助療法の適応は術後の病理組織診断により行うが、腫瘍細胞の脈管侵襲は重要な再発危険因子の一つとされている。婦人科癌において、子宮体癌に限らず脈管侵襲の評価は、H&E 染色により静脈浸潤とリンパ管浸潤を区別することなく行われている。ところが他癌種の多くでは、静脈、リンパ管侵襲を個々に評価し、それぞれの予後因子としての意義や臨床的有用性が示されている。そこで本研究では、子宮体癌においてリンパ管および静脈侵襲を個別評価し、それぞれの臨床的意義および予後に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。			
2. 研究内容			
2006年から2013年までに、琉球大学産婦人科で手術を施行した189例の子宮体癌患者を対象とし、本研究を行った。静脈侵襲の評価は血管の弾性線維に陽性染色を示すビクトリアブルーHE染色を、また、リンパ管浸潤の評価はD2-40による免疫組織化学染色を用いて行った。189例の年齢中央値は57歳(25-84歳)であった。手術進行期はI期143例、II期11例、III期25例、IV期10例、腫瘍分化度は高分化型腺癌が110例であった。			
脈管侵襲に関しては、静脈侵襲のみが15例(7.9%)、リンパ管侵襲のみが34例(18.0%)、両浸潤陽性が21例(11.1%)に認められた。両侵襲陰性は119例(63.0%)であった。進行癌、低分化度腫瘍、および深い子宮筋層浸潤例で、リンパ管侵襲あるいは静脈侵襲が有意に高頻度であった。リンパ管侵襲例では所属リンパ節転移、静脈侵襲例では卵巣転移が有意に高率であった。リンパ管侵襲例やリンパ管・静脈両侵襲例では遠隔転移が高率に認められた。また再発部位に関しては、リンパ管侵襲例ではリンパ節再発が、リンパ管・静脈両侵襲例では遠隔臓器再発が有意に高頻度であった。さらに多変量解析でリンパ管侵襲はリンパ節転移のリスク因子、かつ独立した予後因子の一つであり、リンパ管侵襲例は有意に予後不良であった。			
3. 研究成果の意義と学術的水準			
子宮体癌において、脈管侵襲についてリンパ管侵襲と静脈侵襲に分けて評価した報告は少ない。本研究により、子宮体癌症例の脈管侵襲判定において、静脈侵襲とリンパ管侵襲を個別に評価することにより、リンパ節転移の予測、再発部位、さらに予後情報に関する有用な情報がもたらされることが示された。以上より、本論文が琉球大学大学院医学研究科の博士論文としての要件を十分に満たしており、学位授与に値するものと判断した。			